

---

## 10. 五日目(B)・Edinburgh Tour・3, HMY Britannia

---

ラソー・ブリッジのバス停から乗った路線バスのシートはタータン柄でした。このバスはエディンバラ市内直通ではなく、途中のバス・ターミナルで乗り換える必要がありました。私達が座った二階席には乗客がごく少なかったせいもあって、そこで乗り換えることに気付かず、随分長い停車だなー、とボーっとしていました。

暫くしてからドライバーが二階へ見回りに来て私達に気付き、エディンバラに行くのならあっちのバスに乗り換えなさい、と言ってくれました。

ヤレヤレ、間に合って良かった。

ラソー・ブリッジからエディンバラ中心街までは乗り換え時間をいれて小一時間。運河も蛇行していますがバスの路線はそれ以上に曲がっているし、バス停では乗降客があれば止まり、更に信号ストップもあります。そんな無駄が多いバスでも、ボートで4時間だった所を小一時間。

走行スピードの差を考えれば妥当なところでしょうが、ボートの旅が如何にゆっくりペースかということでもありますね。エディンバラの中心地のバス停で降りた私達はそこから更に別のバスに乗り継ぎました。今度はリース **Leith** 行です。リースとはエディンバラの外港で、昨日エディンバラ城から北東方を見たときに、はるか遠くにフォース湾 **Firth of Forth** が見えていましたがその湾に面した港町です。

今日はこれからブリタニア **HMY Britannia** という船を見学しようというのです。

**H M Y** は **Her Majesty's Yacht** 即ち女王陛下のヨット・ブリタニア号です。

日本では外来語としてのヨットは、普通、セーリング・ボートと受け取られますが、英語本来の意味は「豪華自家用船」とでも解釈すべきでしょう。セールの有る無しは関係ありません。語源はオランダ語 **jacht** 又は **jaghte**。

だから、小さなセーリング・ディンギーなどを持っていたとしても、英国人に向かって

「私はヨットを持っている」なんて言わないほうがいいでしょう。 とんでもない誤解を生じかねません。

そうそう、英語のフラットを日本でマンションと言うようなものですね。 斯く言う私達も日本語でならマンション暮らしですが、英国人には間違ってもそうは言いません。「私達の小さなフラットは・・・」などというのが正解でしょう。 マンションとは、旧領主の住むような大邸宅、というのが本来の意味らしいですから。

\*

それはともかく、ブリタニア号は総トン数5862トン、全長126メートルの堂々たる外洋船。 これこそ正真正銘の「ヨット」です、いや、でした、と過去形にすべきです。 1953年進水のこの船は、1997年12月に退役するまでの44年間で、英王室ヨットとして968回の公式航海をしたのだそうです。 年間平均22航海とは凄い稼働率です。

現役時代には19人の士官と217人のクルー、一個小隊の海兵も乗組んでいたとのこと。 全士官及びクルーは選りすぐりの海軍軍人だったそうです。 スタイルはどう見ても軍艦とは言い難いですが、運航は英国海軍だったことは間違いありません。

現役の頃の資料には、Owner: Her Majesty's Government, Operator: Royal Navy 船主: 英国政府、運航者: 英国海軍としてありました。 リタイア後は The Royal Yacht Britannia Trust 所属となっていて、この組織は non-profit 即ち非営利団体です。

現在はリース港オーシャン・ターミナルに永久係留されて博物館として保存されています。 オーシャン・ターミナルはまだピカピカの近代的ビルで、ショッピング・モールをはじめ、食堂街や映画館街などがある一大総合アミューズメント・センターです。 隣地にはホテルもあり、ブリタニア博物館とタイ・アップして、おたがいが集客の助けになっているのでしょ

うです。 永久保存地を決めるに当たっては、この船の建造地であるグラスゴーと綱引きがあったようですがタイミングよくこの港の再開発計画に乗っかれたので、結局ここに落ち着いたのだそうです。

ブリタニアとはこんな船です。これはオーシャン・ターミナルにあるブリタニア博物館への入り口の通路に飾ってあったモデル・シップ。

見事な造りの縮尺百分の一の精密モデルです。これまでは写真で見ただけでしたが、こうして精密模型を見ると全体にごく地味なデザインで、いかにも海国英王室ヨットにふさわしい気品が漂う船型だと感じました。



船尾の旗を見てください。なにやら白っぽい旗で、船首の英国国旗ユニオン・ジャックとは違いますね。白地に赤の十文字、その上隅にユニオン・ジャックが入っています。これはホワイト・エンサイン **White Ensign** といって英国海軍旗です。このことでこの船が英国海軍所属であったことは一目瞭然です。なお、船首に掲げる旗はオーナーを表し、この場合は英国政府です。

ボート・デッキの右舷中央付近に黒い大型ボートが見えますね、その後ろに四角い窓が並んでいる区画がありますが、この辺が女王と王族の居住区域です。

その一段下、いわゆる上甲板 **upper deck** の一番後ろにも四角窓が並んでいるのが見えますが、この部分に公式晩餐会用のダイニングなどVIP用の部屋が集まっています。

\*

さて、では乗船です。オーシャン・ターミナルの最上階にこの博物館の発券所と入り口があります。入場券にはボーディング・パス(**boarding pass**=乗船許可証)と書いてありました。嬉しくなっちゃいますね。発券所のフロアーから階段で一階降りると船のナビゲーション・ブリッジ・デッキ(**navigation bridge deck**=航海船橋甲板)とほぼ水平になり、そこに橋がかけてありました。



こうやって、いきなりブリッジ（船橋）への乗船です。

普通、船乗りは岩壁からギャングウェイ(gangway=舷梯)を上って行って、先ず上甲板へ乗り込みそれから階段を上って上って、上りつめた所がブリッジなのに・・・。  
いきなり上からブリッジへ乗り込むとは・・・。 こういう乗船の仕方は40年の現役生活ではなかったことで、なんとも不思議な感じです。

舷梯のことを古い歌謡曲の歌詞なんかではタラップという言い方をしますが、我々船乗りは殆どそうは言いません。これもオランダ語 **trap** がなまった言葉で、長崎の海軍伝習所でオランダ人に学んだ人たちから一般の日本人に伝わったのかも知れませんね。

なお、念の為言いますと、上甲板は、船全体の最上段のデッキという意味ではなく「上部構造物を除いた船体主要部（この船の場合は黒塗りにになっている部分）の一番上のデッキ」です。この船の黒塗り部分の中（下のほう）にも何層かのデッキがあるので、その中では一番上という意味で上甲板=アッパー・デッキ **upper deck** と呼ぶのです。元はと言えば、昔の帆船などでは上部構造物などなかったので「上甲板」が文字通り最上段のデッキだったわけです。

この連絡橋の上から左舷前方をみると・・・。



右上に見える黒い箱は航海灯の一つ、左舷灯です。 夜間航海中は紅いライトを点灯します。 航海灯は自船の進んでいる方向を他船に識別してもらうためのもので、暗い海上では船体そのものは見えないので、これを頼りに他船との衝突を回避するのです。

レーダーを初め各種の電子機器が発達した現在も、最終的な衝突回避のための判断は航海灯を頼りにしますし、衝突事件に至れば海難審判でも、そのとき航海灯がどう見えていたか、をシツコク審査されます。 そのことはマスコミに取り上げられた過去の海上衝突事件でいつも問題にされていますから、ご記憶の方も多いと思います。

上の写真で、一般商船との大きな違いはウィンドラス（windlass=揚錨機）の形状。

豪華客船のことは知りませんが、一般貨物船のものとは全く違います。 重い錨とチェーンを巻き上げるためには大きな動力が必要ですから、普通、船首のデッキには大きな機械（揚錨機）がデンと座っています。 しかし、この船では目障りな動力部分をデッキの下に隠してしまっているので非常にすっきりしています。

帆船などもこのスタイルを採用している船が多いですが、それは操帆作業のジャマになら

ない為。 そうそう、軍艦もこのスタイルですね。 それは戦闘のジャマになるからでしょうし、この船ではやはりミテクレでしょう。 こういう構造は当然費用がかさみます。

なんせ、「王室ヨット」なんだからしみったれたことは言いません。 お役人の造る箱物の豪勢なことは洋の東西を問わず、らしい。 一般商船では「安上がり」が最大の要件ですから不細工な機械も丸見えです。

\*

同じく連絡橋の上から左舷後方を見るとこんな具合。



これは左舷ボート・デッキの俯瞰。 いいライフボート積んでますねー。 このボート一隻だけでも目をむくような金額であるはず。 ボートの船体強度も、造作も、ディーゼル・エンジンの信頼性も、きっとピカイチのものでしょう。 一見してシッカリした造りであることが解ります。

あとで後ろから見たらプロペラが二つ、即ちエンジンも二つ、ヤッパリ違うなー。 エンジン二基のライフボートなんて乗ったことはありません。

何しろ高い安いの価値判断の外の世界ですからね。 最初、モデル・シップを見たときの地味な印象は、細部を見るにつけ少しずつ変わってきました。 やっぱりこりやナミの船じゃないなー。

船上には女王の御用車ロールス・ロイス・ファントム・Vという超高級車用が収まったガレージさえありました。こうなると全くジミどころの話じゃありません。

\*

これはブリッジ内部、操舵室と呼ばれる所。



窓の向うに見えるのはオーシャン・ターミナルの外壁です。たとえ豪華ヨットといえどもこの部分は機能一点張り、何の装飾也没有。私の40年間の職場も似たようなもので、何の違和感もなく親しみがもてます。

強いて一般商船との違いをあげれば床が高価なチーク・デッキであること。現在の安手の船は味気ないデッキ・コンポジション（合成床材）ですからね。しかし、この船の建造年を考えれば、特に取り立てて言うほどのことではないかもしれません。

昔はブリッジだけは木甲板という船も結構ありましたから、私もこんなデッキの操舵室は何度か経験しています。でも、なかにはチークではなくて米松でごまかした船もありました。

左に見える木製ニス塗りの円筒形の台は磁気コンパスで、中央の青緑色のスタンドに乗っている真鍮のボウルはジャイロコンパス gyrocompass です。

前者は後者の予備的な役目のもの。精度はジャイロコンパスが圧倒的に勝りますが、精密機械のウィーク・ポイント、故障というものがあります。一方磁気コンパスは要するに磁石を利用したもので、誤差は大きいですが、完全に故障してしまっただけで使い物にならないという事態にはなりません。

コロンブス以前から航海計器として活躍した前時代の遺物・磁気コンパスが、近代的計器のバックアップをつとめるのです。

現在はGPS全盛でコンパスの精度は余り重要視されないかに見えますが、依然として最も重要な航海計器であることは間違いありません。この薄い青緑色を船乗りは計器色と呼び、計器類の塗装にはこの色を多く使います。

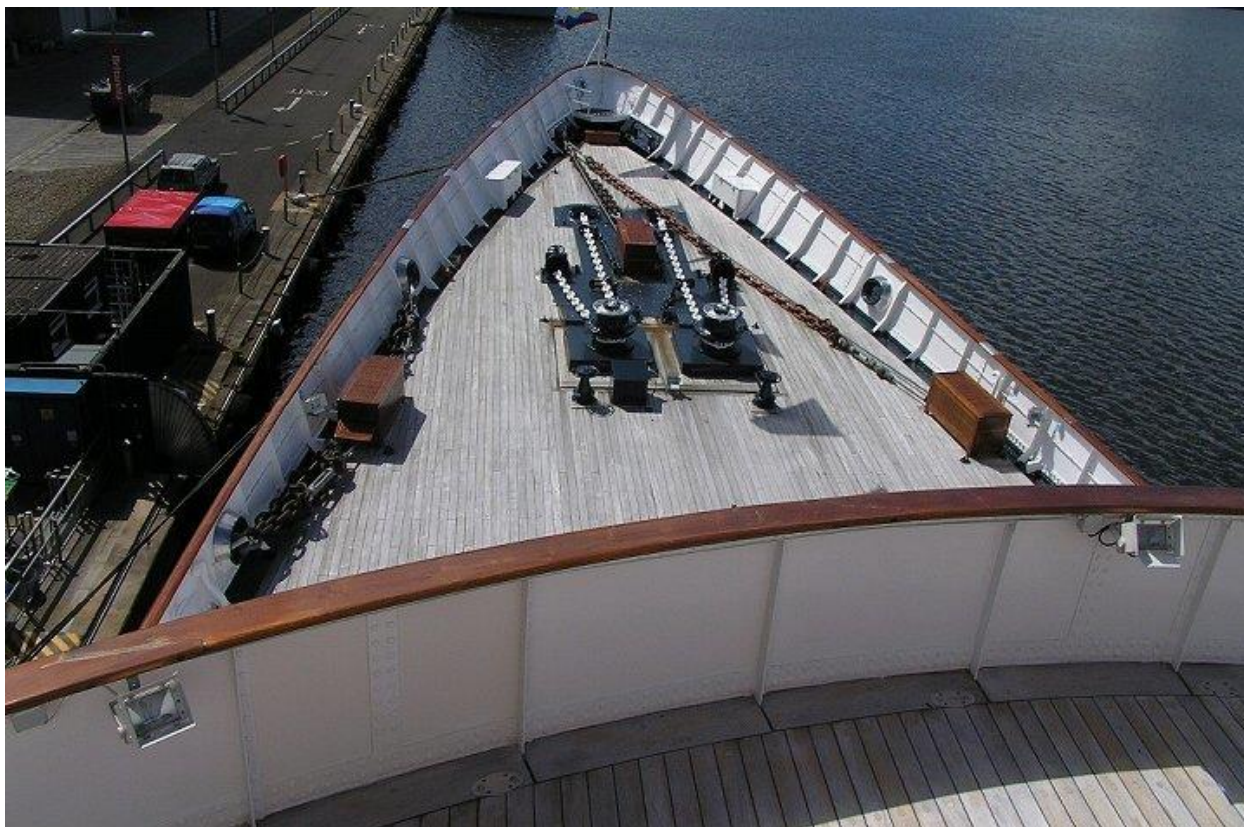
磁気コンパスの左の計器色の円筒とジャイロ・コンパスのスタンドの右にくねっている物は、ヴォイス・チューブ(voice tube=伝声管)です。操舵室と遠くはなれた場所、例えばエンジン・ルームなどともこれで通話したんです。

これも前世紀の遺物ですが、故障がないと言う点では磁気コンパスと同様です。現在の船は、勿論、船内電話を装備しています。

私の親船（オヤブネ、昔は自分が始めて船乗りになった船をこう呼んでいました）は1936年進水の古色蒼然とした船、ブリタニアよりはるかに古い年代の船でした。建造当時は花形看板船だったのでダイニング・サロンにはマントルピースやステンド・グラスがあったり、と私が乗船した当時既に船齢20数年のボロ船でしたが、ナカナカ風情のあるいい船でした。

その船の操舵室がブリタニアのと良く似た感じで、デッキもチークだったし、壁や天井に内張りがなく電線がむき出しになっていたり、磁気コンパスのニス塗りの木製スタンド、ジャイロコンパスのスタンド、ヴォイス・チューブなど共通点が多く、暫しノスタルジアに浸ってしまいました。





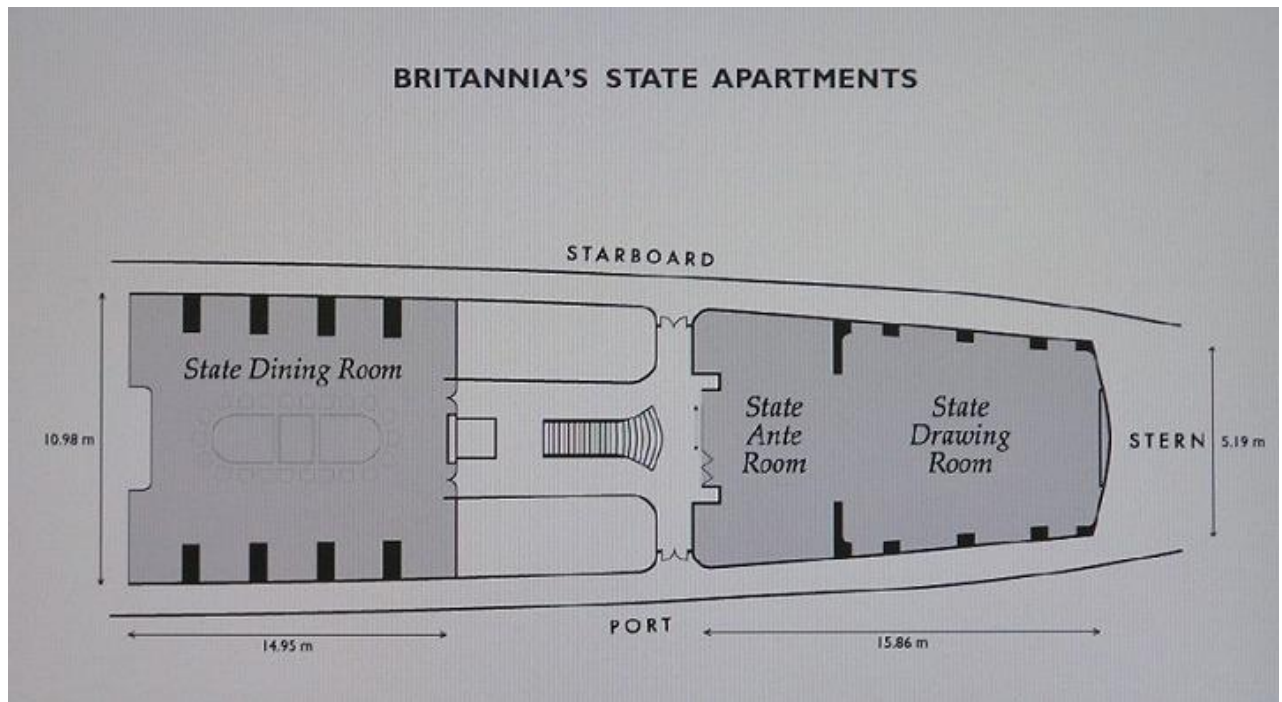
操舵室の中央前面は立ち入り禁止で入れませんでした。すぐ横からみた船首方向はこんな風。40年間見慣れた景色ですが、ここでも大きな違いはデッキが全面チークであることと、貨物艙のハッチ hatch がいないこと。ハッチがないのは貨物船じゃないんだから当たり前だけど、全面のチーク・デッキはやはり別格。



上は左舷ボート・デッキで前方を見たところ。ボートの左側に連絡橋の一部が見えています。ここは、いわゆるプロムナード・デッキ(promenade deck=遊歩甲板)で、カメラの右手後方は王族の居住スペース。 ということは、その昔エリザベス二世も航海中はこのデッキを散歩したのでしょうか。

\*

さて、その王族の居住区画の一段下のデッキ、即ち上甲板の後部に降りてみましょう。



これがステート・アパートメンツと呼ばれるVIP接待用の区画、この船の存在理由の一つだった所です。ヨットと言っても決して女王一族のオアソビ用だけではなくたわけです。船そのものが「海上移動迎賓館」だったと言えるでしょう。

左が船首方向、右が船尾甲板に続きます。どの部屋にもステートが付きますが要するに貴賓のための室、VIP専用区画です。このアパートメント apartment という英語も日本で外来語となるとかなり違う意味になってしまいますね。

特に state apartments という場合は「(宮殿などの)一続きの豪華な部屋」だそうです。

間違っても、四畳半一間の、なんてことにはなりません。

\*

まず、船首側から。 ステート・ダイニング・ルーム、言うなれば晩餐会の間です。



いわばこの船の顔、一番肝心な存在価値のあった場所と言えるでしょう。

この写真は、テーブルや椅子、テーブルウェアの質感が分かるように部屋のごく一部分をアップで撮ったものです。

実際はかなり広い部屋で、上の図面で見ると11m弱×15m弱ですから160平米位にはなりますね。 テーブルの配置次第で最大96人が着席しての晩餐会が可能なのだそうです。 44年間には無数の各国元首・王族などがこのテーブルに着いたのでしょう。

現在、この晩餐の間は一般の利用を受け付けているそうです。 しかし、貸し出しは、お金さえ払えば誰にでもか、どんな目的にでもか、は疑問です。 いずれにしても、私たちなんかがそう簡単に利用できる料金でないことは間違いないでしょう。

しかし、このキャンドルスタンドの蠟燭型照明器具をもうちょっとシャキンとさせといてくれませんかねー。 昨夜、ディナー・パーティーにでも貸し出した後の片付けの手抜きかな? こういうのって気になってしょうがありません。 キャンドルじゃなくて  
ブッタルンドル。

晚餐の間を船尾側に出ると、女王が居室から下りてくる大きな階段がある広い階段室です。階段室の船尾側にはアンテ・ルーム Ante Room と呼ばれる控えの間があって、そこを通り抜けて一番船尾側に進んだ所にある部屋が次の写真、ドローイング・ルーム Drawing Room です。



ドローイングとは食事が終わったVIPの休憩とか、談話室みたいなもんらしい。そういう状況に身を置いたことがないので良く分かりません。居心地のよさそうな部屋ではあります。でも、寝っ転がったりは出来そうもないね。

写真には入りませんでしたでしたが左手にはグランド・ピアノもありました。これより一つ前のアンテ・ルームのほうはVIPの取り巻き、一段下の高官連中が控えていた所だったのでしょうか。

手前の円形の真鍮盤には Press 2 then 0 then press PLAY と書いてあります。これは船内音声ガイドの案内盤です。2を押してから0を押して、それからPLAYを押せ、そうすればこの部屋の説明が聞けるヨというわけ。

この音声案内器、どうせまたヘンな日本語だろうと思って借りませんでした。5×10×50センチ位の重そうな無線機みたいなヤツで、持って歩くのもメンドクサイしね。係りのオバサンは「エッ、イラナイノ？ なんで？」と不思議そうにしてみましたね、だって料金は入場料にコミでしたから。



私達にとって、晚餐の間や談話室なんかよりもっと気になったもの、それは船内のあちこちにこんなコーナーがあったことでした。これらは士官居住区や乗組員・兵員居住区にあったものです。

まあ、そりゃそうですね、女王様が止まり木にとまって、チョット一杯、なんてことはないでしょうから。それにしてもいいなー!! この部分は特にうらやましーい。



クイーン用はこの左の写真のように、やはり止まり木はありません。その代わり直立不動のバーテンダーが待機していたんでしょうね。

これは、サン・ラウンジ Sun Lounge 女王様の日向ぼっこ用サンルームで、そこにあるバー。只今シェリーを冷やしております、という図。

そして、一般見学者の通るすぐそばに右のようなモノが無造作に置いてあったりもするんです。左のボトルがやや減っているのが気になります。

どうせ中身は濃い紅茶だろー、なんてのはゲスのかんぐりか？



左はクイーン・エリザベス二世専用の寢室。 右は夫君エディンバラ公専用の寢室。 隣あっていてドアでつながっています。 どちらも意外にジミですねー。 まあ、いったん寝ちまえば豪華も質素も夢の中、寝心地さえ良けりゃどうでもいいか。 これはさっきのVIP接待区画の一段上のデッキです。

子供の学習机みたいな小さなデスクと椅子が微笑ましい。 今時、日本じゃ小学生だってもっと立派なのあてがわれてますよね。 それで頭の中身が重くなるかどうか、はまた別の話……。 勿論、女王の書斎、というか執務室は別にあって、そこにはもっと立派なデスクがあります。

また、ドレッシング・ルーム(更衣・化粧室)も別室です。 決して狭いわけではないですが、造作一つ一つに派手派手しさがありませんね。

チャールズ皇太子とダイアナ妃のハネムーンにもこの船が使われたのだそうですが、そのほかマーガレット王女、アン王女、アンドルー王子など王家一族の子女のハネムーンには殆どこの船が使われたようです。

\*

次に、下左、キャプテンズ・デイルーム(Captain's Dayroom=船長公室)。 位置はブリッジの一段下のデッキ。 普通、船長室は公室、寢室、浴室の三つで構成されています。

このデイルームは来客や官憲の応対など執務室として使われるのです。

デスクはテーブルの左手にあります。



右は、ファースト・オフィサー(First Officer＝一等航海士)の部屋。いずれもジミヘン、質実剛健。さすが元祖・海国の、ピリッと潮気のきいた船乗りの部屋というべきか。必要にして充分、それ以上を求めず、みたいですね。

それともVIP接待区画に費用がかかり過ぎて、乗組員居住区画にまで回らなかったか？ いやいや、やはり元祖・海国の船乗りの節度と見るべきでしょう。

\*



左、下士官(petty officer)室、木製二段ベッド、4人部屋。

右、バラック(barrack＝兵員室)、鉄パイプ三段ベッド、12人部屋。

質素である点は全ての寢室に共通ですが、階級の差は歴然です。船の世界では致し方ないこと。特にこの船は、戦闘のための軍艦ではないにしても、乗組み全員が海軍軍人でしたからね。

ちなみに私の船上生活のスタートは、旧航海訓練所・初代進徳丸の練習生室、木製二段ベ

ッド、8人部屋。 あの部屋で始めて寝てからいつの間にかとうに半世紀が過ぎてしまいました。

\*



これは船内医療施設。 左は診察室、X線撮影も出来たみたいですね。

右は隣接の病室。

この船はヨットとしてだけでなく、戦時には病院船としても機能するように設計されていたのだそうで、だから、船にしては医療設備も充実していたんですね。 幸いなことに病院船として就役する羽目にはならなかったのです。

\*



左、ランドリー、洗濯室。 工場みたいですね。

右、エンジン・ルームとは思えない、清潔で明るいエンジン・ルーム。

この船のエンジンは蒸気タービン二基、合計1万2千馬力。 このタイプは振動の少ないのが一番のメリット。 この船では静かが一番でしょうから、燃費効率が悪い、なんて事は無視々々。





王族居住区の最後部、即ちボート・デッキの最後部にある広々としたデッキ。 ヴェランダ・デッキ Verandah Deck と呼ばれる所です。これがほんとのヴェランダならわが部屋の前のは一体なんなんだ、単なる軒下？

中央の記念撮影中のアニさんが握っているタイム・ベル（time bell=号鐘）には HM YACHT BRITANNIA 1953 と彫り込んでありました。

その上は英王室紋章。左のキンキラは磁気コンパスの形ではありますが、こんなドハデなコンパスなんて見たことがないので確信がもてません。中を覗いてみりゃ良かった。

紋章の上のガラス張りのところは、元々はオーニング(awning=日除け)だけを張ったオープン・デッキで、王族がカクテル・パーティをしたり、色々なデッキ遊びをした場所だったそうです。

最初のモデル・シップのこの部分を見ると原型がどうだったか解ります。しかし、ここをパーティ用に貸し出すために最近新たにガラスで囲ったのだとか。現在この船はトラストによって運営されていますが、入場料の上がりや寄金だけでは財政は楽ではないらしく、色々と新規営業をして稼がなくてはならないようです。晚餐の間の貸し出しもその一環で、そのほか色々なパーティーの企画もあるようです。

さて、これまで船内をくまなく見て回った後の感想としては、一番最初にモデル・シップを見たときの、あの印象、地味ながら気品があるな、というあの感じが戻ってきました。一つにはこの船の古さと乗組員スペースの質素なたたずまいが、自分が乗った古い船の記憶と合致する部分があったからかもしれません。

全体にシッカリ建造費をかけて造っているにもかかわらず、装飾過剰なところは一つもなく、迎賓館に相当する「晚餐の間」や「談話室」さえも立派ではあっても華美ではなく、好感の持てるデザインでした。

映画などで見る豪華客船の華麗さに較べれば、その地味さ加減は今日の何枚かの写真でも見て取れるのではないのでしょうか。VIP関係の区画以外は女王や王族の居住区画でさえクルーズ客船のファースト・クラスなどに較べれば超地味といってもいいと思います。

いい船でした。

この船が進水した当時、私はまだ船乗りになるなんて夢にも思っていなかった中一でしたが、子供向け科学雑誌でこの船の紹介記事を読んだ記憶が鮮明にあります。昨日のことはサッパリ憶えていないのに50数年前のことならハッキリ・クッキリですからねー。 困ったもんだ。

\*



最後は右舷側アッパー・デッキ(上甲板)。 左の四角窓の連なりは例のダイニング・ルームです。 木彫りのミミズクが海を睨んでいます。 何でこんなものがここに置いてあるのか分かりますか？

これは海鳥ヨケ、とくにカモメが飛んできてその辺に止まるのをよけるためなんです。 カモメってヤツはかなり凶々しくて、一羽来ると次から次に飛んできてはその辺に爆弾を落として行くんです。 それを撃退しようというわけ。

こういうミミズクは個人所有のセーリング・クルーザーなどにも付けているのを見かけますが、効果の程はイマイチみたいです。 ミミズクの頭にカモメがちゃっかり止まっている写真を海事雑誌で見たことがあります。 カモメはカラス同様かなりのワルなんです。

ブリタニアは管理が充分行き届いていて、ピカピカに磨き上げられていますから、カモメの爆弾などどこにも見当たりませんでした。  
このミミズク君が頑張っているからかも・・・。

ではまた来週。 R & N

\* \* \* \* \*